

国内研修活動報告書

8月22日から8月28日まで島根県北部にある隠岐諸島に行ってきた。隠岐は松江駅からフェリーで3時間程度のところにあり、私たちは隠岐の海士町というところに滞在した。隠岐諸島は、600万年前に火山活動でできた島々であり、島根半島から北東へ約65キロ、大小180余りの島々から成り立つ群島型離島である。この中で人が住む島は西ノ島（西ノ島町）、中ノ島（海士町）、知夫里島（知夫村）、島後（隠岐の島町）の4島で、島前（西ノ島、中ノ島、知夫里村）と島後に分かれている。島前では人口が少ないことが問題となっている。本土までフェリーで3時間かかるということもあり、狭いコミュニティの中で生まれ育ち、私たちの思う常識と島前の方が思う常識とではずれが生じる。そこで、島の中学生に少しでも視野を広げてもらうことを目的とし、島前を訪れた。最初は隠岐について全く知識がなく、不安だらけだった。去年の島前合宿に参加した先輩方から聞いた話を頼りに島前についてのイメージを膨らませ、合宿を迎えた。島前に到着してまず思ったことは、空が青く自然が多いということだった。港が近いせいかは分からないが、道路にたくさんのカニがいて大きいものから小さいものまでたくさんのカニがいた。車で轢かれてしまんじゃないかと何回もヒヤヒヤした。バスの運転手に話を聞いたら夏場では当たり前の光景らしい。道端にバッタやトカゲもいて、自然豊かだからこそたくさんの虫がいるのだと感じた。島前合宿1日目は、観光ということで西ノ島を訪れた。港の近くの商店で釣竿を借り、人生で初めて釣りをした。魚の餌である小エビを触ることにすら抵抗があった自分だったが、魚が釣れた時の嬉しさは半端ではなかった。借りた釣竿だったため、たくさんの魚を一気に釣ることは難しく、苦戦していたところに車から降りてきたおじさんが釣りのコツを伝授してくれ、釣竿まで貸してくれた。島前の人みんな優しくて温かかった。帰り際に釣ったアジをたくさん分けてくれた。宿舎に戻って釣ったアジを調理して食べたとき、今まで食べたアジの中で一番美味しいと感じた。みんなで一緒に釣りをして、みんなで一緒にご飯を食べるという体験も普段では滅多にできないから、かけがえのない時間であり、とても楽しかった。

二日目は、西ノ島中学校の生徒たちとの交流授業と福祉体験が行われた。交流授業では、生き方学習と題して島の子どもたちが大学生の年齢になった時、何をしているのか考えてもらうことを目的に行われた。なぜなら西ノ島には中学校までしかなく、高校、大学は無いからだ。私たち大学生がどんな目標を持ち、どんな勉強をしているのか、これからの生き方や今努力していることについて話し、中学生と一緒に考えた。最初は中学生との会話がぎこちなく、あまり会話も続かなかったが、ゆっくり時間をかけて話を聞いてみる

と、私が考えていた以上にしっかりと考えていて驚いた。私がペアを担当した生徒会長の生徒は、自分のやりたいことを仕事にするため、水産系の高校に進学したいと話してくれた。やりたいことを素直にやるまっすぐさに感動したし、初心に戻れたような感覚だった。交流授業でむしろ中学生に教えてもらったことの方が多かったのではないかと感じた。今まで中学生と触れ合う機会がなく自分たちが授業をやることもなかったもので、どのように話したらいいのか、どのように自分の思っていることを伝えたらいいのかかわからず歯がゆい気持ちになった。島前合宿がスタートする前から中学生と交流授業するのはわかっていたのにもかかわらず、自分の100パーセントの力で中学生に接することができなかったことは反省すべき点であった。授業をするということ、自分の思っていることを人に伝えるということが、いかに難しいかということが身にしみてわかった1日だった。交流授業を終えた後、福祉体験のためシオンの園を訪れた。シオンの園は、最高で10人しか受け入れることができない小規模なデイサービスセンターである。小規模の方が職員と利用者さんと密にコミュニケーションを取ることができ、利用者本人だけではなく、利用者の家族の方々とも密にコミュニケーションをとることができるため、家族の方が安心してサービスを受けることができる。10人以下だと、細かい配慮にも対応できるため、変化に気付きやすいというメリットがある。またシオンの園のすぐ近くに保育園があるため、デイサービスの利用者さんが保育園の行事を見に行く、保育園の子どもたちがデイサービスを訪れるなど、世代の関わりが多く刺激を受けられるため好まれている。実際にシオンの園を訪れてみて感じたことは、利用者さんの方から積極的に話しかけてくれて、とても元気だなというのが印象に残っている。実際のところデイサービスを受ける必要なんて無いのではないと思うほどであった。シオンの園には良い点が多くあるが、問題点も存在する。福祉施設の多くが抱えている問題である、若手の人材不足である。施設の職員は皆島生まれ島育ちであるが、高校を卒業したら本土に学びに行き吸収をして、30歳過ぎに島に戻ってくるという風潮の中で育ったため、若手の職員がいないのである。人材不足だけでなく、行政が都市化を進めているため、小規模でこじんまりとしたデイサービスができなくなってしまうのではないかと心配もある。実際に施設に訪問し、滞在して思ったことは、島前だからこそできる小規模のデイサービスのあり方を尊重してほしいということだ。東京の福祉施設で小規模でサービスを提供し、利用者の家族と密にコミュニケーションを取るのは難しいと思う。島だからこそできることを大切にしてほしいと思う。

三日目は、島前の伝統であるキンニャモニャ祭りに参加した。キンニャモニャ祭りとは、しゃもじを二つ両手に持ち、円になって歩きながら音楽に合わせて踊るものだ。各団

体でエントリーをし、それぞれの団体が入賞を目指すという仕組みだ。私たちは飛び入り参加という形で参加させてもらい、島前の方から踊り方を教えてもらった。踊り方はいたってシンプルだったのですぐに覚えることができた。ただ、50分間ひたすら踊り続けるのは体力的に苦しかった。それにもかかわらず、島前の方達は、笑顔で楽しそうに踊っていて輝いていた。キンチャモニャ祭りに参加して感じたことは、幼稚園の子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまでたくさんの世代の方々が参加しているということだ。また、各団体が仮装したり、お揃いのユニフォームを着たりすることで団結力を深めて入賞めざして頑張っている姿はとても輝いていた。そんな雰囲気の中で踊ったため、踊り終わった後は自分たちも達成感に包まれた。キンチャモニャ祭りが終わった後、たくさんの花火が打ち上げられた。先輩たちのおかげで最前列で見ることができ、30分間にわたって打ち上げられた花火は、今まで見てきた中で一番綺麗でものすごい迫力だった。

この島前合宿を通して思ったことは、大学生というのはとても小さな存在であるということだ。都会と地方を往復してそれぞれの魅力を吸収しても、それを伝達するには限界がある。でもそれぞれの魅力を知ることができたことに感謝し、自分のできる限りの範囲で伝達することができたらいいなと思った。